全国のタワークレーンのコクピットの視界を再現したモニタールームは、デイトナハウスの鉄骨空間とベストフィット。一切の虚飾を排除した“ノンデザインのデザイン”。鉄骨ミニマリズムの真骨頂が発揮される空間。この鉄骨空間は、デジタルネットワークを介して日本全国とつながっているのです。

Text/Atsushi TAMADA　CG/Kenta KITAGAWA（ldk）, Soma YOKOI
Drafting/Reo KIRIBUCHI

デイトナが提案する
新しい建築のカタチ
DH×L
DAYTONA HOUSE×LDK

本社から全国のクレーンを遠隔操作 21世紀型、地方都市のオフィスビル

デイトナハウスのスチール建築が生み出す新しい世界感を求める会社が増えてきています。ここで紹介するのは、香川県にあるリモートクレーン操作を手掛ける企業の実際例です。

「アフターコロナのニッポンは、むしろ地方が元気になる時代！」と、この連載でも繰り返しお話ししてきました。最近では、出社することが出張扱いになるという新しい勤務体系を某大手会社が導入したり、地方都市に本社機能を移設するなど、21世紀型の社会が本格化するにしたがって、その劇的変化を実感しております。

21世紀はまさに情報通信とモビリティの時代。情報通信技術を駆使しつつ、一方で自分の足で動くというリアルを求める遊動民的な機動力が優位になる時代だと考えています。環境の良い田舎にいても、自然を満喫しながらテレワークなどを通じてビジネスが成立してしまう。出社のエネルギーと時間の無駄が融解していく時代です。

その意味では、デイトナ読者のようなライフスタイルこそが楽しく花開く時代だということが、アフターコロナにははっきりと見えてくるでしょう。今回ご紹介する例も、地方都市の新しいカタチでの活性化を実感する21世紀型のプロジェクトです。何と‼ 全国にあるタワークレーンを遠隔操作で操ってしまうというお話なのです。

四国は高松にある株式会社アルモは、先ごろデイトナハウスの加盟店として参画して頂いた企業。建築工事を手掛ける一方で、タワークレーンのオペレーター事業を行っている企業でもあるのです。

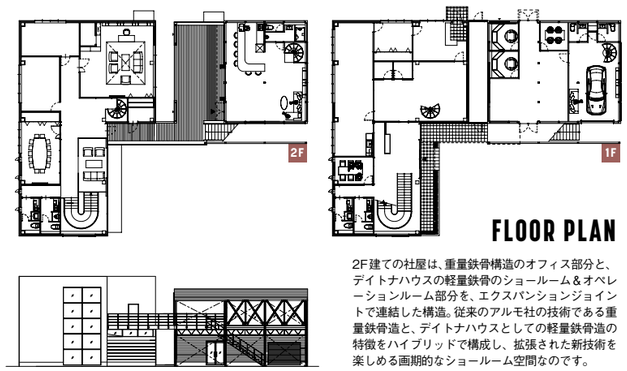
従来タワークレーンの操縦は、オペレーターが現場まで通って、コクピットまでの長い梯子を何回も上り下りしなければならない重労働でした。しかし急速なデジタル技術の発達で、遠隔によるクレーン操作が可能になってきてるというから驚きです。

このアルモ社は全国に先駆けて、いち早くその遠隔クレーン操作を採用し、技術開発にも携わっています。そこでこの度、本格的な技術導入にあたり、その遠隔操作センターをデイトナハウスの鉄骨社屋に実装することになったのです。

クレーンのコクピットからの視界を再現したモニターを見ながら、全国津々浦々の現場のクレーンを操作する。何とも近未来的な仕事ですね。しかもその環境には、鉄骨の素材感を剥き出しにしたデイトナハウスの鉄骨空間がベストフィットという判断なのです。地に足の着いた近未来。何とも素晴らしい世界です。アフターコロナの社会の変化の中で、オフィスや店舗は劇的にその在り様や存在意味が変化します。“ノンデザイン”のソリッド感を前面に打ち出した、デイトナハウスの鉄骨空間が、むしろリアルな近未来なのかもしれませんね。

都市に最先端が集中していた20世紀。そんな最先端の象徴であった“トーキョウ”というレッテルが剥がれ落ちていく……。21世紀はまさに、本質と内容で勝負の時代なのです。

この新しいカタチの社屋は、2023年初旬に竣工予定です。完成をお楽しみに。



FLOOR PLAN

2F建ての社屋は、重量鉄骨構造のオフィス部分と、デイトナハウスの軽量鉄骨のショールーム＆オペレーションルーム部分を、エクスパンションジョイントで連結した構造。従来のアルモ社の技術である重量鉄骨造と、デイトナハウスとしての軽量鉄骨造の特徴をハイブリッドで構成し、拡張された新技術を楽しめる画期的なショールーム空間なのです。

写真上／向かって右側の軽量鉄骨棟には、2階にデイトナハウスのショールーム、1階にガレージ空間とオペレーションルームを配置。写真下／重量鉄骨棟のオフィス空間は、大空間をつくるための重量鉄骨のメイン構造に、デイトナハウスのLGSフレームやオリジナルサッシを組み込むことで、適材適所の合理的なデザインを実現。

What's DAYTONA HOUSE ?

デイトナハウス×LDKの建築システムを構成するのが軽量鉄骨のLGSパネル。厚さ3㎜～4㎜、幅12.5㎝、厚み5㎝の『Cチャンネル』と呼ばれる部材を、横幅182㎝、縦270㎝の長方形に溶接して製作。デイトナハウスは、この基本の形を連結することで、住宅やガレージのみならず、別荘、店舗、賃貸住宅などの様々な建築を作っていく、全く新しい建築のカタチとなっています。パウダーコーティングが施されたその鉄の素材感と、力の伝達を受け持つ『ブレース』が織りなす、インダストリアルで飽きの来ない空間のテイストも持ち味となっています。

www.daytona-house.com

LDK inc. 代表　玉田敦士
デイトナをはじめ、カーマガジンでの長期連載、ムック本であるCAR&HOMEにて、常にクルマと住宅の関係について提案し続けてきた建築プロデュース会社LDK inc.。建築設計はもちろんのこと、建築システムの開発や商品開発も行う。

Photo/Ken TAKAYANAGI　Text/Atsushi TAMADA

いよいよアフターコロナ時代へ！ 当然建築も変化し始めた！

デイトナハウス×LDKの“新しい建築のカタチ”が全国で増殖中

社会の変化の中で浮かび上がってきたガレージアパート人気の必然性。その理由を改めて考えてみました。

TOPICS 01 全国各地で浸透してきたGLB現象

デイトナハウスのガレージアパートGLBが、全国で増殖し始めています。単に表面的に「大人気です！」というだけではなく、たまにはその原因を深く掘り下げて、客観的に一つの“現象”として考えてみたいと思います。

戦後、焼け野原となったニッポンの土地建物の価値は、その時点で一旦ゼロになりました。何しろ焼け野原ですから、一見は何もないように見えます。しかし、山手線（省線電車）や私鉄沿線、地下鉄、幹線道路などの交通インフラが土地や建物の「価値」の基準になるシステム、すなわち20世紀的なシステムは1930年代には既に完成しており、そして一番最初にそれらは復旧したのです。なので、戦後の復興は価値を決めるシステムとしては、新しいものを作ったわけではなく、実は戦前に出来上がっていたシステムの再生なのです。

では20世紀のシステムとは何か？それは東京の銀座を中心とした同心円状の価値序列（路線価）に従って、土地と建物の価値を相対的に決めていくシステムです。交通インフラがその価値決定の座標軸なのです。仕事＝出社であった20世紀は“移動に要するエネルギー”と“土地建物の価値”が連動していました。だから中心部に行くほど土地価格が高く、かつ中心部が高層化（ビルやマンション）していったのです。

しかし21世紀のシステム＝デジタル化が進むと、価値の基準は“移動に要するエネルギー量”ではなくなりつつあります。これはまさに大転換です。しかしその大転換には、コロナパンデミックが加速度を与えました。例えば先頃NTTグループは、リモートワークを社内標準にすると宣言しましたが、これは仕事＝出社であった従来の観念が崩れつつある証拠です。このような会社が今後増えてくると、ますます交通インフラ中心の土地建物の価値の基準は変わってくるでしょう。

兵庫県加古川市に建築中のGLB。幹線道路沿いの好立地の豊かな敷地に、のびのびと建つGLBの威容が今から楽しみです。地方の衛星都市のGLBは、その利用法も千差万別。この敷地は店舗や事務所の利用にも最適。2022年8月完成予定。

福岡市博多区金の隈に建築中の複合的な大型GLB施設。ショップ専用棟も含む3棟で囲みこむ敷地に、かつてないインダストリアルな世界観を現出させる。その存在感に今からワクワクが止まらない。2022年11月完成予定。

価値の変換がもたらす周辺化と自分で動く必要性

そのような大きな社会の変化の中で、少しでも中心に近いところに住むという必然性が弱まり、周辺に拡散する現象が始まります。周辺に居れば、必要に応じて少し長い距離を自分で移動することも必要になります。そこで移動手段を内包できるガレージアパートのニーズが高まるという現象が徐々に顕在化しているのです。〝自分で動く必要性〟。この必要性を積極的に人生の楽しみとして捉えることができる人々にとって、ガレージアパートは極めて理にかなった新しい〝カタチ〟なのです。

価値の基準が変わるとはじめてライフスタイルという言葉に実感がこもる

一方で中心から距離で価値が決まっていた20世紀システムの中では、どんな生活をしたいか？ということが建築のカタチに反映されませんでした。判で押したような画一的な住宅やアパート。なぜそうなってしまうか？と今改めて考えると、極端に言えば鉄道インフラが作る中心からの価値序列を流通させる業者しかいなかったからです。ライフスタイルという言葉が〝単なる趣味〟と解釈されて、なんとなく実感が伴わなかったのも、あらかじめ価値の基準がどうにも動かし難く存在している上での単なる味付けだったからです。

しかし、徐々に中心からの距離による価値の序列が無意味化すると、「どんな生活をする機能を有しているか？」ということが中心テーマになるのです。その時初めて〝ライフスタイル〟という言葉に意味と実感がこもる。その意味では、〝ガレージ付き住居〟が既に明確な意味と機能を持っていることが、現象としてのGLB人気のもう一つの理由であると言えるでしょう。

表面上の余分なデザインが必要ない理由

前述したようなガレージアパートの必然性を深く理解していればこそ、むしろ余分な表面上の手練手管（デザイン？）によって、一見目新しいものであるかのようにフェイクする必要は全くないのです。デイトナハウスのGLBが、機能と素材感を最前面に打ち出して、余分なデザインをしないのは、そのような理由からです。そのシャープな論理と潔さがむしろカッコ良さに転換するようなイメージ。これがインダストリアル系と言われる世界です。

GLBは新しい建築のカタチ

これらの現象の根底には、地に足のついた〝自由＝フリーダム〟への渇望があると考えています。時代はデジタルネットワークの進展を端緒として、20世紀的な〝相対的な比較ばかりの世界〟が崩壊していく過程です。そして相対的な比較ばかりではなく、自分らしい自由な新しい価値を構築していく人が増えてきた21世紀的社会。現象としてのGLBを例にとって話しましたが、その他のデイトナハウスラインナップも同様の〝自由＝フリーダムの再構築〟という現象がカタチになったものだと言えるかもしれません。

富山空港から僅か10分の才覚寺町に建築中の大型GLB『S.M.C.242』。法規制限界の500㎡（2.5スパン×7住戸）のGLBが、2棟横並びで出現します。富山空港を利用して、都市圏に出張する人にとっては、出撃基地として絶好のポジション。2022年11月完成予定。

TOPICS 02 GLBがカバーする多様なライフスタイル

ソリッドなスチール枠の大開口から雪を頂く大パノラマアングルで八ヶ岳を望む。長野県茅野市の通称“縄文GLB”はオールシーズンにわたって、クルマ、バイク、自転車も格納しながら楽しめる賃貸アパートになっています。

2022年9月に淡路島で誕生する『WELL GARAGE』。目の前は海！ という最高のロケーションです。賃貸募集も開始しているので、詳しくはデイトナハウスのサイトより！

GLBは、都市やその近郊でもそれぞれにニーズがあり、住まい手の満足感とオーナーの安定的な賃貸経営を実現しているのですが、リゾート地ではさらに今まで発見されなかった新しいニーズがありました。それはリゾート地でのガレージ付き賃貸別荘という利用法。従来、賃貸別荘というジャンルは休日しか利用せず、あまり普及しませんでした。しかしコロナの賜物、テレワークの爆発的普及で、長逗留して平日も仕事しながら別荘を利用する軽い二拠点生活が可能になり、一気に賃貸別荘の見え方が変身。

例えば八ヶ岳の麓の長野県茅野市にあるGLB（以前この連載でも縄文GLBとしてご紹介）は、募集直後に満室。その潜在的なニーズを実証しています。茅野市は冬はスキー、夏は爽やかな避暑地で自転車フリークには垂涎の場所。平日の午後に来て、その間はテレワークを活用しつつ働きながら遊ぶ。そして適当なタイミングで帰る。そのようなバランスが絶妙なワーク＆ライフスタイルは、まさに21世紀型人間の暮らし方なのです。

関西では特に大阪、兵庫、四国からのアクセスに優れる淡路島が、そのようなサテライトのスポットとして人気を博しています。そんな淡路島の洲本にも、ガラスの大開口から穏やかな大阪湾を望む好立地のGLBがほどなく完成します。

専用アタッチメントを装着すれば、電動シャッターを生かしながらガラスの店舗や事務所として利用できることもGLBの特長です。そのような利用実例も増加中。

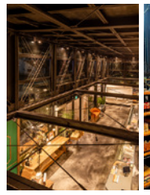
TOPICS 03 店舗建築の“新しいカタチ” TYPE-Sの存在意義

コロナ・パンデミックが吹き荒れる中で、店舗経営も好不調の濃淡がはっきりしてきたようです。長年のお店経営を時代に即してデリケートに舵取りすることは非常に大変ですが、社会のカタチが変化していく中で、適応する部分と変わらない信念のバランスが商売繁盛継続のポイントになるようです。その中で、デイトナハウスの店舗系プロトタイプ『TYPE-S』の好実例も全国に登場してきました。

例えば写真の金沢市内にある中谷精肉店『NIKUO』は、ガラスのファサードと吹き抜け空間を上手に有効利用した典型的なTYPE-Sの実例です。色の使用を極力抑えた鉄骨とガラスのインダストリアルな吹き抜け空間に、誇らしげに待ち受ける高性能の冷蔵ショーケースと高級な霜降り肉。

たぶん日本で一番カッコいいお肉屋さんといっても過言ではないと思っています（笑）。デイトナハウスの空間性、鉄骨露出のリズム感やソリッド感が経営のコンセプトを邪魔せず引き立てる理想の店舗。その結果、見事に行列のできる店になっているとのこと。コロナ後の社会の激変のピンチを、むしろチャンスに変える新しい店舗イメージの再構築にデイトナハウスは様々な業態で寄与し始めています。

あえてグレートーンで統一したNIKUOのファサード。内装もハイスペックな肉の赤色のみを差し色にして、その他はインダストリアル感満点のグレートーンで統一するところに、経営者の仕事への愛をひしひしと感じます。必然お店は繁盛するのであります。



鉄骨の豊かな吹き抜け空間に、整然と待ち受ける高性能な冷蔵ショーケース。あまりにも旨そうな霜降り牛肉の赤色が、ダークトーン空間の良い差し色になっています。まさに日本で一番カッコいいお肉屋さんの面目躍如。

TOPICS 04 森の中へ、海の前へ！ 自然と共存する高床式建築の時代

人間の都合で自然を破壊することに、そろそろ限界が来ているという認識は、世界共通に広がっている中にあって、建築の基礎コンクリートや地面の舗装は、土中生物の窒息をもたらす人間のエゴそのものかもしれません。そこにきてデイトナハウスの高床式建築は、コンクリートを一切使用せず、空中に“フワリ”と浮かぶ“地球にやさしい建築”としても注目されています。特に大自然に包まれて生活することが、以前にもまして望まれる中、斜面地でもコンクリート擁壁を必要とせず、土地の形質に寄り添うように建築できる高床式工法は、まさに21世紀仕様。森の中では極力樹木を伐採せずに建築可能。また、海の前では、“フワリ”と浮かび防波堤に遮られないオーシャンビューを確保します。個人使用のリゾートハウスはもちろんのこと、店舗や宿泊施設としてもますます応用可能性が広がりそうなのです。

森の中にあって、極力樹木を伐採せず、しかも土地のアンジュレーションをそのままに、擁壁やコンクリート基礎を必要としない、高床式フラットハウス『TYPE-F』。斜面に建てると、窓からのビューはまさにツリーハウス気分なのです。

海辺は様々な制約要因があり、難度の高い建築になります。特にせっかく海に面した場所でも視線の先には巨大で無粋な防波堤が邪魔をします。高床式はフワリと浮かび上がって純粋なオーシャンビューを成立させ、しかもスタイリッシュな建築物を実現するのです。